

～犯罪被害者とその家族の人権～

～性犯罪被害者～

「人には回復をする力、前を向く力は備わっていて、誰でも幸せに生きることができる。」

8歳の時に性暴力の被害に遭い、その後、男性恐怖症、対人恐怖症、様々な依存症などを発症した K さん。その後、周囲の支え、ご自身の気づきにより、それらを克服し、現在は自分の体験を語る活動をしています。

○事件の後どのような状況でしたか。

事件の後、両親は、そのことに一切触れなかったため、自分も話すことができませんでした。性に対する知識はありませんでしたが、「汚れてしまった。恥ずかしい。」という意識がありました。事件の次の日に、新聞にそのことが掲載され、クラスメイトがなんとなく気づき、学校で質問攻めにあいました。その時から心を閉ざしました。なるべく目立たないように、普通になりたいと思っていました。友達もできませんでした。自分の感情を抑え込んで学生時代を送りました。

○どのような症状が出ましたか。

頭痛が続きましたが、当時はカウンセリングを受ける機会もなく、不調なまま過ごしていました。男性恐怖症・対人恐怖症になり、進学で東京に行くと、人混みのストレスで体重が一気に落ち、病院での治療の日々でした。20歳で大分県に帰ってきてからは、アルコール依存やその他の依存症などにもなり、このままでは自分はだめになってしまうといった自覚がありました。

○Kさんは結婚されていますが、旦那様との出会いは。

東京から戻ってきて、高校時代の同級生の集まりに誘われ参加し、現在の夫と再会しました。「人を好きになったり、結婚なんてできないだろう」と思っていました。夫のことを人としても好きになり、25歳で結婚しました。

○現在の講演活動を始めたきっかけは。

41歳の時に、一度自分の境遇を整理してみたいという気持ちが出てきました。大阪の団体が主催する、性暴力被害者のサロンに行ってみたくて。同じ被害者

の方々と交流しましたが、そこで、自分の体験を講演している人たちと出会いました。そのときの人たちとは現在も友人として交流が続き、一緒に活動をしています。

私も何かできないかと思い、公益社団法人大分被害者支援センターに行って、尋ねてみたら「犯罪被害者の支援員さんに話してみませんか？」といわれて、支援員に話をしました。それが最初でした。現在は県外でも講演をしています。

○現在は新聞や雑誌などでよくお見かけしますね。

新聞などに出ることに、当初は迷い、家族にも相談しました。そのときに、娘から、「ママがやらなくて誰がやるの？」と言われました。そのことが大きな後押しになりました。

○伝えたいことを教えてください。

性被害のことを正しく知ってほしいし、その後のことも知ってほしい。

どんな人でも回復をする力が備わっていますし、誰でも幸せに生きることができます。どんな過去があっても、この瞬間からの未来は作ることができるんです。性暴力の被害者は「暗い」「苦しい」とイメージをされてしまいがちですが、トラウマを抱えたままでも、幸せに生きることがもできます。

いろいろな生きづらさを抱えている方々に、「ほんの少し行動する勇気を持って！」と言いたい。一歩踏み出すのは怖かったりしますが、行動しないと何も変わりません。私はそれを応援したい。でも、踏み出すのはその人自身。一歩踏み出してみたら新しい世界が見えてきますよ。